

沿 革

江戸時代の本市は、川上地区や文違、榎戸、大関などはすでに村として確立していましたが、ほとんどの地域は佐倉牧と呼ばれた7つの牧（小間子、柳沢、高野、内野、取香、矢作、油田）のうち、柳沢牧、小間子牧という幕府や佐倉藩の野馬の放牧地でした。

明治初期、新政府は東京の難民、窮民対策事業として小金牧、佐倉牧を開墾することを決定し、柳沢牧への入植は明治3年4月から始まりました。

「八街」という名は、小金牧、佐倉牧の開墾にあたり、その着手した順番が8番目だったことからつけられた字名であり、明治5年11月2日に正式に「八街村」が誕生しました。

明治22年4月1日の町村制施行により、八街村は隣接の榎戸新田村・大関新田村・文違村・雁丸新田村と合併して八街村となり、川上地区も同日、大谷流・小谷流・根古谷・岡田・用草・東吉田・勢田・吉倉・砂・上砂の10村が合併し、鹿島川の上流地域に位置していることから新たな村として「川上村」が誕生しました。

八街村は大正8年1月1日に町制施行により八街町となり、昭和29年11月1日には八街町と川上村が合併し、その後、平成4年4月1日に市制施行により千葉県で30番目の市として「八街市」が誕生しました。

歴史的には”新しいまち”といわれる本市においても、今から約2万5千年前の旧石器時代の石器が出土しており、縄文時代や古墳時代から平安時代の土器片などが市内各所で発見されています。また、スポーツプラザの建設に先立って実施した埋蔵文化財調査では、横穴式石室や箱式石棺の中に武器等が副葬された古墳時代後期の古墳2基が調査されるなど、旧石器時代以来の祖先たちの生活の痕跡が明確に残されています。